

第三の千年を迎える東方キリスト教文学

若干の研究総括と展望

E・N・メツシエルスカヤ

江口 満訳

第一の千年の暁と共に生まれた新しい宗教であるキリスト教は、教義、倫理、実践というあらゆる側面において、常に様々な異なった見解が存在する中で生まれ、発展し、磨かれていきました。それはヘレニズム時代の混濁主義から多くのものを吸収したことによるものであり、また様々な民族や社会階層に広まり、浸透していく過程で、異なる感覚によって受け入れられ、それぞれの土着の規範や習慣、伝統の上に重ね合わされていったためです。しかし、キリスト教徒は当初から、改宗前の信仰が偶像崇拜だったのか、ユダヤ教だったのか、教会派

か異端かという違いや、富める者が貧しき者か、といったことにかかわらず、周囲の世界と相對していた、という点では皆共通していました。彼らを結ぶ最大公約数は、民族や社会階層、富ではなく、キリスト教徒を平等たらしめ、非キリスト教徒との違いを象徴している信仰でした。それは使徒パウロの言葉によくあらわれています。「……ギリシヤ人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隸、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです」(コロサイの信徒へ

の手紙三・一一)。草創の多くのキリスト教作家たちは、このような信念を広めていきました。そして、政治や文化、社会的な差異に重きを置かない人々が普遍的な結合を果たしたところから、宗教的信条によって結ばれたキリスト文化が出現するに至ったのです。

その一部を成すキリスト教文学は、イエス・キリストとその弟子たちがアラム語で伝道していたにもかかわらず、最初に文書の形になったのは、地中海文化圏の共通語であったギリシャ語、コイネーによってでした。「使徒言行録」に有名な一節があります。「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らがすわっていた家中に響いた。そして、炎のような舌が別れ別れに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、『霊』が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました」(二・一―四)。これは二つの面で重要です。まず、キリスト教の伝道師たちは、地中海文明と縁のない国々でキリストの教えを広めていく時に、必ずぶつかる問題があることを念頭においていることがわかります。第二に、新しい教えはそれぞれの民族の言葉で

広められなければならないという信念であり、それは草創のキリスト護教学者に既に見られる考えです。四世紀には宣教師アルファベットの概念が出来上がり、言語学の知識を持つ宣教師によって以後数世代に渡ってキリスト教文化圏に入った民族の文字が作られていきました。こうしてアルメニア、ゴート、エチオピア、アルバニア、フン、更に下って九世紀にはスラブ民族が文字を持つようになりました。それらの文字を基に各民族の文語が形成されていきました。二十世紀の文献学が、遺伝学的にも、類型学的にも共通性のない民族言語の文化的・歴史的共通性に注目をしたことは、大きな前進であったと思います。このような東方キリスト教言語という共通のグループに第一の千年の各時代に、ギリシャ語やシリア語、アルメニア語、コプト語、エチオピア語、ゲルジア語、アラブ語、スラブ語が入りました。このような言語現象については、専門家の関心がますます高まっております。東方キリスト教言語グループ研究の方向性が明らかになりつつあります。それは語彙の借用、語彙形態論的、意味論的な翻訳借用、人名学、聖書から出ている

慣用語の共通性、また言語間の相互作用によって変わり、ある言語のシンタクスから影響を受けて、新しい表現が翻訳言語に生まれるという「統語的感応」という現象によって起こる統語論的近似性などです

民族言語の共通性が東方キリスト教圏の文学上の共通性を育んでいったことが、今では認められるようになりましたが、それも現代言語学研究の一つの功績といえるでしょう。このような共通性を生み出したもう一つの要因は、幅広い翻訳活動です。したがって、翻訳文献もまた東方キリスト教文献を研究する文学者や史料学者の注目を集めることとなりました。

翻訳は東方キリスト教文学において、量的に多いということだけでなく、思想的意義という点でも重要な部分を占めていました。その根幹をなしていたのは新約・旧約聖書の翻訳でした。東方キリスト教圏の民族は、いずれも聖書の翻訳に関して複雑な長い歴史をもっており、それはいまだ十分には研究し尽くされてはいません。その証拠に、今日でも聖書の校注本は全くないのです。聖書翻訳の複雑な経緯をシリア語文献を例にみてみましょう

う。シリア語では一世紀から八世紀にかけて五つ以上の旧約聖書の翻訳が行われました。その際、初めは古代ヘブライ語から訳され、その後ネストリウス派とキリスト単性論派という二つの強力な異端の出現とともに、ギリシャのセプトウアキントからも翻訳されるようになりました。シリア語の新約聖書の翻訳も複雑な経緯をたどっており、まだあまり研究されておりません。我が研究所にはシリア語の古い福音書の手書きの断片が三種類保存されていますが、それはギリシャ語訳と古代シリア人の引用によって知られているものです。これはいわゆる「独立福音書」と呼ばれるもので、(キュルトン版とシナイ版の二つがある)新約聖書のペシタと「混合福音書」です。後者はギリシャ風に「ディアテッサロン」と呼ばれており、四つの正典といくつかの外典に関して、福音書を綴ったものを寄せ集めています。これらの古文書の相関関係及びテキスト校訂学的、年代的な位置付けについてはいまだに様々異なった見解があります。シリア語の福音書は最も古く、テキスト校訂学上からみて正確であると多くの学者が考えているため、新約聖書校訂の見

地から重要なのは当然ですが、シリア語版がアルメニア語やエチオピア語、アラブ語の福音書など、他の東方キリスト教文献に影響を与えているという点でもこれらの問題の解明は重要です。コプト語の聖書翻訳も複雑な経緯をたどっています。コプト語の方言であるボハイル、ファユム、サヒド語の翻訳が何種類か残っています。しかし、私たちが持っている史料の中からは、各ババージョンの年代確定も、相関関係もはっきりさせることはできません。ただ推測できるのは、サヒド語版が主に普及したのは三世紀から四世紀で、ボハイル版はもっと長く三世紀から七世紀まで広まっていたということです。更に、コプト語の方言版で現存している新約聖書は、いずれもエジプトから来たギリシャ語のテキストとタイプが一致していることも重要であることはいまでもありません。しかし、コプト語のこれら方言への新約聖書翻訳の歴史は、まだ細部までは解明されていません。聖書の正典以外に聖書に出てくる人物や出来事について記述した新約・旧約のアポクリファ（外典）も翻訳を通じて、東方キリスト教圏に入ってくるようになりまし

東方キリスト教全体に共通する翻訳書には、奉神礼を正しく行うための知識が集約されている文書もあります。これは大ワシリー、ヨハン・ズラトウストの聖体拝領などの儀式や様々な賛美歌詩に関するものです。これらはみな聖詠や賛美歌にあるリフレインを源としています。もともとは聖詠の一節であったのが、その後、音節詩の形で独立して作られるようになりました。キリスト教の賛美歌が早くからあったことは、聖使使経や黙示録が示す通りです。最初の賛美歌の作者としてはシリア人のバル・ダイサン（二―三世紀）、シリアのエフラエム（四世紀）、ギリシャ人でナジアンゾス出身のグレゴリオス（四世紀）、ラテン語を使ったメジオリオンのアムヴロシ（四世紀）があげられます。賛美歌が東方キリスト教の歴史・文化圏全体の財産となっていく中で、長きに渡って大きな役割を果たしたのはシリア人でした。名をあげますと、シリア語で詩を書き、早くからギリシャ語に訳されていたエフレム・シリヤ、シリア人でありながらギリシャ語で書いたロマン・スラドコベツ、カリフの廷臣で、ビザンチン帝国の敵、「サラセンの異端者」とし

た。これらの文書は（後に「聖書外典」と呼ばれるようになるのですが）一般的には紀元後数世紀のユダヤ・キリスト派やグノーシス派から十四世紀のノブゴロドモスクワ異教派までの様々なセクトや異端の活動と結び付けられています。しかしそれは極めておおざっぱな形でみただけにしか当てはまりません。例えば、オスロエンのアプガル皇帝とイエス・キリストの往復書簡についての伝説がシリアで生まれ、アポクリファに入っています。それが様々な時代を通じて、様々な民族の公認の教えであったことを私たちは明らかにしました。

東方キリスト教文献におけるアポクリファの部分は最も興味深いものではありませんが、同時にそれは正典の枠に縛られずに同じ話でも様々なバリエーションを持っているために、難しい研究課題でもあります。しかも、キリスト教文献の中でもアポクリファが最もフォークロアと結び付きが深く、各地域の文献ごとにそれぞれの特徴がはっきりと浮かび上がってきます。また、アポクリファはまだ全集どころか、説話の簡単なリストさえなく、研究されていない部分が極めて多い状況です。

て破門されたダマスクスのヨアンネスもギリシャ語で書いていました。東方キリスト教圏の賛美歌で最も有名なのは、九世紀以降、ストウヂェット修道院のフォードルとその仲間、修道女で詩人のカッシア、ヨハンなどの創作によって主に発展していきました。

キリスト教文学の中でも特に幅広く親しまれたのが、キリスト教徒の迫害や処刑、聖人の列に加えられた実在及び架空の人物の受難の生涯を描いた聖人伝です。それら聖人の祭日は、教会歴や殉教録に記されており、最も古いものは四一年のシリア写本に残っています。そもそも聖人の祭日が決められて、初めて東方キリスト教圏で記述がみられるようになったのは七―八世紀で、ギリシャ語で記録されています。そのころから、聖人の生涯を綴ったメノロジオン、あるいはミネヤと呼ばれる聖人伝が著されるようになりました。その中には東方キリスト教圏の様々な言語で書かれたものが大量にあります。例えば、七人の眠れるエフェソスの少年たちや神人の伝説はシリアのものであり、アルヘリドの伝説はコプト文学、聖二ノはグルジアですが、その他多くのものがギリ

スト教圏全体にも広まるところとなりました。聖人伝は全く異質なテキストの集大成ともいべきものですが、東方キリスト教圏では何世紀にも渡って年齢、階層を問わず、あらゆる人々に愛読されてきました。聖人伝は一つのジャンルとして、時代と共に発展していく一方で、独特の空間的な変化を伴っていきました。つまり、東方キリスト教圏の民族がそれぞれ、地域の伝統や環境に合わせて、同じ物語に独特の解釈を加えていったのです。時として地方の文献（シリア語、ゲルジア語、アラビア語、アルメニア語）の方が、編集されて洗練されたギリシア語のもの、例えば十世紀ビザンチンの有名な学者、シメオン・マタフラスタが書いたものより、原型に近いこともあります。ゆえに、聖人伝という一つのジャンルの発達を研究するには、各地域の聖人伝も見なければなりませんし、それぞれの文献の歴史を探るにあたって、すべての翻訳言語のテキストを見る必要があります。二十世紀になり、それは雑誌 *Muscon* と *Analecta bollandiana* に発表された新しいテキスト及び研究論文で見事に証明されています。

家ヨハンの書いた原典を研究していくと、彼はシリア語だけでなく、ギリシア語やラテン語の材料も使っていたことがわかります。様々な言語からなる中世の東方キリスト教年代記には、過去の時代を描いた歴史的作品で消失してしまったものの断片がかなり残っているのです、重要な史料学的価値をもっています。

東方キリスト教文学全体の模範となったのは、キリスト教年代記の「父」、ケサリヤのエフセヴイ（四世紀）の作品です。しかし、それは原語（ギリシア語）では完全には残っており、アルメニア語とラテン語訳、及び、ギリシア語、シリア語、アルメニア語、アラビア語の時代的にはより後の歴史物の一部としてのみ知られているだけです。このことからキリスト教の年代記を総合的に研究することがいかに重要かがわかります。その一方で今日言えることは、東方キリスト教文学はまだほとんど未開拓の分野であり、一貫した研究計画がないということです。

世俗的な作品で東方キリスト教文学で広く知られているものに、アラムにルーツを持ち、翻訳と改訂を経てキ

これまでにあげた文献は、すべて教会的・宗教的なものです。しかし、それとともに信仰上の行為とは直接は関係のない、より世俗的な内容・スタイルの文献も翻訳を通じて東方キリスト教圏に広まりました。それは歴史を扱ったもので、一番にあげられるのが世界史の年代記的なものです。このようなタイプの歴史物はキリスト教史上、早い時期から発達しましたが、その発達に大きな影響を与えたのが、聖書に含まれている歴史書でした。東方キリスト教圏でそのような翻訳ものが好まれたのは、中世の人々が自分の視野を広げていきたい、思想的、世界観的な過去と現在のつながりを確立したい、世界的歴史の流れにあって、キリスト教世界に足を踏み入れた各民族の位置付けをしたい、という思いから行われたためと思われる。年代記の作者たちは「世界創造」、あるいは「アダム」から話を始めて、それぞれの現代まで糸をつないでいきました。これらの作品は、一人が書いたものに別の人が加筆していくというふうにして作られ、時に使用言語の異なる複数の作者の手になるものもあります。例えばシリア人でエフエソス出身の史

リシャルビザンチン、アルメニア、古代ロシアに普及したアヒカル賢人物語や、ワルラームとヨサフの物語、そしてスラブ語圏ではステファニトとイフニラトという名で知られた、カリラとジムナの寓話集などがあります。

以上が翻訳を通じて東方キリスト教文学全体の流れとなった主なものです。それが一応完成したのは第一の千年の後半で、キリスト教圏に入った各民族は、翻訳によってこれらの文学を取り入れました。それはいつキリスト教を受け入れたかにかかわらず、共通の現象でした。

十一世紀から十二世紀の古代ルーシでは、ビザンチンの影響を受けてスラブ語の文語が形成されていったにもかかわらず、当時のビザンチン文学は知られていなかったという事は、長い間、古代ロシア文学研究者にとって驚くべき事実でした。そのような現象が起きたのは、キリスト教の思想的な発展に関する文献のみを意識的に選んでいったためと思われる。古代ルーシでは、翻訳の材料として「古典的な」キリスト教文学、キリスト教の教義の基礎がわかりやすく書かれているもの、他国の東方キリスト教圏で既に「公認」となっているものを選ん

でいったのです。

各民族に共通のキリスト教文学が形成された、もとの翻訳言語は、必ずしもギリシャ語だけではなく、様々な言語がその役割を果たしていました。例えば、初期アルメニア文学はシリア語を仲介言語とし、後にそれはギリシャ語に変わりました。アラブ・キリスト文学圏でそれぞれの時代やカリフ体制下にある各地域によって、シリア語から訳されたり、ギリシャ語やコプト語から訳されたりしました。コプト文学にとっての翻訳原語は、ギリシャ語、エチオピアはシリア語、コプト語、アラビア語、グルジアはシリア語、アルメニア語、ギリシャ語、アラビア語、スラブ文学にとつてのそれはギリシャ語、そしてシリア語もそうであった可能性があります。共通の東方キリスト教文学の形成過程において、ギリシャ語の文献が翻訳によって各民族文学に浸透しただけでなく、逆の流入もありました。例えば、コプトの伝統は東方キリスト教文学に聖人の格言集 (Patericon) という一つのジャンルをもたらし、シリアは前述したように、賛美歌文学、ギリシャルビザンチンは世界年代記をもたら

しました。

東方キリスト教圏の各民族が共通の作品を翻訳文学として取り入れていったことによって、同じものが読まれていっただけでなく、共通のジャンルが各民族文学に確立されていきました。例えば、聖人伝では受難の物語と伝記、賛美歌はアカフイストや讃頌、トロパリといった共通のジャンルが出来ていったのです。もちろん例外もあります。コプト文学では、歴史物はジャンルとして知られていませんでした。古代ロシア文学ではこれらのジャンルのうち、世界年代記だけが確立されました。そして主なキリスト教文学の作品は、すべて地域の独自性が加味されていきました。古代ルーシでは、年代記は伝統的に存在し、しかもビザンチンの影響を受けて天候記録をつける特徴があります。聖人伝も翻訳ものから地域独自のものが生まれ、賛美歌も同じく翻訳から民族固有の詩や賛美歌が生まれていきました。

東方キリスト教圏の各民族文学におけるジャンルの共通性は、更に芸術的な表現手段が同じであったことにも裏付けられていました。それは象徴的思考に立脚した世

界観が規範となったものです。中世キリスト教芸術が何よりも目指していたのは、見える世界と見えざる世界の象徴的な関係を説明することであり、その二つの世界を貫く関係性を理解するためのよりどころが聖書でした。

異なる言語でも同じジャンルであれば、無数に同じ場所や決まり文句が出てきますが、それは東方キリスト教圏の各民族文学の目的と課題が同じであったためです。その一例として聖人伝の形式があげられます。それはビザンチンで六世紀に既に確立し、その後あらゆる地域文学に取り入れられていきました。受難者伝では、異教の

神々に生け贄をささげるよう要求されるが、キリスト教徒はそれを拒否する、そして異教徒とキリスト教徒との信仰をめぐる論争、そこに奇跡が起こる、誇張法による受難の描写に続いて、キリスト教徒はその中を無傷で切り抜ける、そして投獄、処刑徒と死後の奇跡、といったエピソードが必ず入ります。一方、伝記では少し構図が異なります。高潔で深い信仰心をもつ両親、あるいは逆に異教徒の両親から生まれ、未来の聖人が幼少のころより敬虔なる信仰によって自己犠牲的行為を行い、世俗の

世界と決別し、献身を貫いて死を迎え、死後に奇跡が起こることになります。このような構図は、もともとは類似した人生の局面を取り上げていく中で出来ていったものですが、後には、聖人の生涯で事実が明らかでなかった場合に、必ず好んで用いられる基本的な形となりました。最も、そういった決まった構図が形成されたのは、人生のあらゆる側面にシンボリックな意味を見出そうとする考え方があったためでもあります。聖人伝の作者は、主人公と彼を取り巻く外界との象徴的な関係性を描くことによって、永遠の真理、キリスト教的モラルを描こうとしたのです。

キリスト教文学は、様々なシンボルによって組み立てられており、そのシンボルがもともとどこからきたのかわかっていて初めて、書かれたものの内容も、書き方の特徴も、現代人が正しく理解できるようになります。東方キリスト教文学にはそれぞれのジャンルに、それぞれの作者が好んで用いたシンボルがありました。例えば、シリア文学では、真珠が究極の清廉さや高潔さといった精神的価値の象徴になっています。「真珠は神の国」

という福音書のシンボルの他に、シリアではイエス・キリストや聖母マリヤ、キリストが払った犠牲のシンボルとしての、浄められたパンとワイン、キリスト教的徳である処女性、受難者と聖人の遺骸も皆、真珠にたとえられます。

東方キリスト教文学をより深く理解するためには、キリスト教的シンボルのルーツと各言語における複雑な思想的・文学的發展の軌跡を網羅するようなシンボル辞典の作成という極めて難しい課題と取り組まなければなりません。

十九世紀から二十世紀にかけて行われた膨大な東方キリスト教文献研究と蓄積された実際資料によって、今後の総合的な研究に関して次のような方向性が見出されてきます。

まず第一に、テキストを一つの言語だけでみるのではなく、現存するすべての翻訳言語で研究を行うということです。そうすることによって、多くの史料学的課題の解決が可能になります。多言語の同じテキストの対比や言語学的分析によって、オリジナルの言語を確定した

り、翻訳文を基に、失われた原典を復元したり、一つのテキストの異なるバージョンの年代確定を行ったりすることが出来ます。

第二に、東方キリスト教圏のすべての言語で、同じテーマを扱った異なるテキストを一つにまとめるという作業があります。そうすることによって、一つのテーマが発展変化していった跡をたどり、各地域でいつ、どのように変わっていったのか、なぜ地域色が添えられていったのかが見えてきます。

しかし、そのような研究を行うためには、まず事前に文書が書かれた年代と場所、オリジナルの言語を確定し、背景にある社会的・文化的環境や、影響を与えている地域独自のキリスト教の伝統を明らかにしておく必要があります。

(E・N・メツシエルスカヤ、

ロシア科学アカデミー東洋学研究所上級研究員)

(訳・えくちみつる)

(本稿は一九九七年五月三十、三十一日に行われた当研究所ロシア・センター開所記念シンポジウムでの講演原稿です)